

微型小説「請站著認錯」について

坂 野 学

—

本年度の講読の後期に『2009年中国微型小説精選』の中からいくつかの作品を取り上げて、輪読した。「微型小説」を選んだのは、授業時間に読むことができる分量を配慮したためであり、その文学的価値については考慮してはいなかった。およそ作家が文学的な価値の高い作品を仕上げようとすれば、2～3頁の分量では不足であろう。その意味で、「微型小説」は様々な読者に提供される軽い読み物と言っていい。盛り込まれる内容は月並みで、ストーリー展開もいわばべたなものが多い。が、その月並みでべたなものの中にこそ、作家と読者が漠然と共有している認識があるともいえる。

小寧の「請站著認錯（立ったままで謝って下さい）」は、人に跪いて謝するという所作は卑屈だからやめるべきだということが説かれる作品だが、そのような主張は別に新しい見解でもない。社会主義を標榜する中国において何を今更といった感をもつ者さえいるだろう。筆者もその一人なのだが、しかし、年間の優秀作として選ばれたこの作品が提示している事柄はそれほど単純でもないのかもしれない。小論では、軽い読み物として読み飛ばしてしまいがちな「微型小説」作品を考察することを通じて、中国社会の一端を垣間見ることにしたい。

二

小寧「請站著認錯」を考察するに当たって、作品自体を紹介しておかなければならないが、そもそもが「微型」なので一部を省略するだけで理解に大きな影響を与えてしまう。いささか紙数を費やすこととなるが、本節では、拙訳で全体を示すことにし、考察は節を改めておこなうことにしたい。

その日は彼が父親に連れられて街に仕事に来て8日目のことだった。父親が長いこと問い詰めて、彼はやっとしどろもどろになって面目丸つぶれのできごとのいきさつを話し出した。お昼の仕事中に、彼はお客がテーブルに忘れていった携帯電話機をこっそり自分のポケットに隠し入れて、引き返してきたお客に見つかってしまい、そのために、レストランから暇を出されたのだった。

彼の話がまだ終わらないうちに、父親の手がバシリと彼の顔を叩いていた。憤った父親は大きな声で彼を叱りながら、ちょうどそこにあった鉄の棒を手当たり次第につかみあげた。父親の鉄の棒が彼のからだに振り下ろされようかというところで、二人の父親の同僚が折よく父親を遮りとめたのだった。

いまだ怒りのおさまらない父親は、ぐいっと彼を床から引っ張り上げて、彼の耳たぶをぎゅっとひつつかむと、「さあいくぞ、おれといっしょに社長さんのところに戻って謝るんだ」。

父親がこっぴどく力を入れたので、彼は耳もちぎれてしまうんじゃないかと思った。彼は戻りたくはなかった。ものを盗んで首になったのに、また戻って頼み事をすると、18になったばかりの彼にとっては、全く顔が丸つぶれなのだ。しかし、彼にはすべがなかった。もし行かなければ、父親はほんとうに彼を殴り殺してしまうだろう。

こうして彼が働いていたレストランまで引っ張られてきたのだが、数百

メートルの道のりの間、彼の耳ははや痛くて感覚がなくなっていた。

店に入って、尋ねて社長が事務室にいると分かると、父親はまるで犯人を連行するように彼を引っ張っていった。

父親はドアをノックした。振る舞いはたちまち静かなものになり、慎重に深くしている。

「お入り下さい」という声を聞くや、父親は振り向いて彼をきつく睨み付けて、潜めてはいるが、かえって厳しい調子で、「中へ入ったら社長さんに跪いて謝るんだ」と言った。

彼はちょっとあっけにとられた。18歳の彼は、おばあさんに新年の挨拶をするときしか跪いたことはなかった。彼は跪きたくなかったが、父親の目つきは、彼に拒む勇気をなくさせた。

父親はそっとドアを押して入っていった。彼はその後ろに従った。部屋の中では、社長がすでに椅子から立ち上がっており、彼らを見て、ちょっと意外そうにした。

父親は社長が口を開くのを待たず、先手を打って、「このガキはものの道理もわきまえませんで、どうか社長様の寛大なお心で、これにもう一度チャンスをお与え下さい。社長様も御存じの通り、今は働き口を探すのも難しくて…」、そういういながら、父親は彼をぐいと押して、社長の目の前に押し出した。

彼はこのうえなくきまりが悪かった。お昼にもものを盗んで、現場の指導責任者が直接彼を解雇した。社長は少しも顔を出さなかった。こういうことは、社長に決済してもらう必要はないのだ。彼がなんと言っているのか分からず、ぐずぐずしていると、父親は「まだ跪かないのか」と大声で叱った。

彼は慌てた、膝が思わず下に曲がっていった。彼が跪かないうちに、2つの手が彼をぐっと支えた。社長がとがめて言った、「立ったまま謝りなさい」と。

彼が頭を上げると、社長は相変わらず彼の覚えている厳しい表情だった。

このとき、父親はいささか慌てた。明らかに、社長が彼に跪かせないというのは、父親からすれば、彼のお詫びを受け容れない、彼を許さないということなのだ。そこで、父親はサッと近づいて彼のからだを押さえつけて、「おまえ跪かないか」と叱った。

社長の方は彼を引っ張っている手を緩めることなく、さらに力をこめて彼の腕を支えた。

父親は一層慌てて、しどろもどろになって、「こいつを許してやって下さい、まだ18で、からだも弱くて、私と一緒に現場に行かせたくはないんです。ここの仕事は少しは楽だし、やっとのことでありつけたんで……家ではお金を今かと待っているんです」と言った。

涙が彼の目ににじんだ、やりきれないのか、気まずいのか、うしろめたいのか言い表せなかった。父親が言ったことはその通りで、家ではお金が入り用だった。母親が手術をするためにお金が必要になって、そのためにこそ彼が街に出てきたのだし、そのためにこそ、彼はあの見るからに高価な携帯電話機に心が動いたに違いないのだ。彼は大きな声で、「社長さん」と言うや、膝が思わず下に曲がっていった。

ところが彼が思ってもみないことに、社長が「戻ってきて勤めてもかまわない、だがしかし、君は立ったままで謝るんだ」と言うのを聞いた。

彼と父親はともにぼかんとして、頭を上げて社長を見ていた。

社長は言った、「君のことはいま知ったばかりだが、君は確かに大きな間違いをしでかしてしまったんだ。何のためであれ、盗みはどれもみんな恥ずべき行為だ。いったん身についてしまったら、君の一生を台無しにしてしまうことになる。だがね、私は君が改められると信じている、私も君にもう一度チャンスをやろうと思う。しかしだ、君は立ったままで謝りたまえ、立って行っってはじめて、人との対処というのは正々堂々とできるものなんだよ」

彼が目の中にこらえていた涙が、次々に流れ落ちてきた。彼は自分の体を懸命にまっすぐに伸ばして言った、「ぼくが間違っていました。必ず改めます。永遠に二度とこのようなことをしでかしません」。

その瞬間、彼は自分が背が伸びて、弱々しい体に成長の力がみなぎっていることをはっきりと感じた。

「君を信じているよ、明日から勤めに戻ってきなさい」、社長は振り向いて彼の父親に言った、「あなたも、これからは子どもに立ったままで人に対処することを身につけさせないといけないよ、たとえ人に謝るのでもね」。

父親は力強くうなずいた。

社長の事務室を出ると、父親は、「おまえはいい人に出会えたな」と言った。

そのとおり、彼は自分が、立ったまま謝らせ、立ったまま対応させる立派な人に出会ったことを知った。

数年後、彼は社長が新しく開いたレストランの店長になった。

三

主要な登場人物は、18歳の少年とその父親、そして少年の仕事先のレストランの社長（原語は「老板」）の3人。そして主人公に当たるのは少年である。

この少年は18歳とされているが、それでは学歴は高卒と見なせばいいのだろうか。作品内では明示されていないが、本来なら父親と同じ現場で肉体労働をさせるところだが、体が虚弱で肉体労働は無理なので、幸いなことにレストランのサービスという仕事を見つけたのだ、と書いてあるところから判断すれば、中学卒業だったということになろう。

では、この父親の学歴はどうなるだろうか。肉体労働を生業としていているところから見れば、同じく中卒あるいは小卒というのが妥当な線だろう。息子をより上位の学校へ通わせようと考えた形跡も見られない。親としての自分の考えを、力でもって息子に従わせてきたように読み取れる。それが彼の父としての「教育」なのであろう。

しかし、この父親は世間を渡ってきた者として、人並みの処世術を身につけている。高等な知識は持っていないようだが、生きていく知恵には不足していない。なかなかしたたかなのである。

ちなみに、この社長の学歴はどのように判じるのが妥当なのだろうか。答えるのは非常に難しいことだが、少なくとも所謂オーナーシェフから成り上がってきた人物とは考えにくい、むしろレストラン・チェーンを経営の実践としておこなっている実業家で、自分なりの経営哲学をもった高卒あるいは大卒の人物と考えるのが相当かと思われる。

以上の主要3人が「跪く」という所作をどのように見なしているのかも、まとめておくことにする。

「跪」は両膝あるいは片膝を下につけることだが、ここで意味するのは単に物理的に膝が下につくということではなく、社会的な意味をもった所作としての姿勢である。身を低くすることによって、相手に対する畏敬を表したり、恭順の意味をしめす。また、相手から恩恵を引きだす懇願や謝罪を意味する。

少年は、祖母に対して畏敬を表して跪くことを容認しているが、老板に対して謝罪と懇願のために跪くことは受け入れがたい。

その父親は、畏敬であれ、謝罪であれ、懇願であれ、それは処世術として当然だと見なしている。両者の違いは何に由来するのかといえば、少なくとも作者の言い方に従えば、18歳だから、まだ未熟で経験が足りないからである。

一方、老板はといえば、跪くという所作一切を、人の本来の心から表され

たものではなく、卑屈でしかないものだと考えて否定している。

少年と父親が社長の事務室に入ってくるとき、社長はすぐさま椅子から立ち上がって二人を迎えている。これは社長が、人と対等な関係を保とうとする人物であることを表している。彼は跪くという卑屈さを嫌うと同時に、尊大な振る舞いをも嫌うのである。平等主義が彼の尊ぶ理念であろう。

作品は過ちを犯した少年が、悔い改めて成長していくという内容であり、教養小説に類するものである。グレマスの行為項を基に見れば、少年が成長を遂げることに對して、敵対する者ないし障害となるものは少年の父（その抑圧する力、その古い処世観）であり、援助する者は社長（その支える力、その助言、新しい価値観）となる。すなわち、少年の成長とは、父親が所属する世界から社長が所属する世界へと転進することである。父の抑圧的な力から脱した少年は、社長の言うとおりに立ったままで堂々と謝罪を述べたとき、「その瞬間、彼は自分が背が伸びて、弱々しい体に成長の力がみなぎっていることをはっきりと感じた」のである。それは、今までとは違う新しい自分に生まれ変わったかのような瞬間だった。

以上のように読み取るとき、少年の父親はまったく否定的な存在でしかない。しかし、父親の立場からすれば、所期の目的である少年の再雇用を実現させたのは父の処世観に基づいた果敢な行動に由来するものである。ことを振り返ってみれば、少年は盗みを犯したことによって解雇されたことを当然だと認めていた。再雇用を頼み込むことは考えもしなかったし、道理に合わないと言え感じていた。また、社長の方はといえば、店内で従業員が盗みを犯すのは論外であり、その場で解雇処分すればよいと規定していたはずである。まさか、解雇された従業員が直接社長の下に再雇用を直訴に来ようとは考えてもみななかったに違いない。少年や社長の考え方からすれば起こり得ぬことが、父親の行動によって生じさせられたのである。

父親の考え方を斟酌すれば次のように言えよう。規範や道理によって縛られている世の中であっても所詮は人がつくっているものである。そうであれ

ば、当該の人に直接働きかけることによって変更させることは可能だ。跪くという所作は、自らを卑下することによって上位者から恩恵を引きだす、弱者の戦術だと父親は心得ているのである。今回は息子に跪くという所作を完遂させることはできなかったが、跪こうとする姿を社長に見せるだけで、めざましい効果をあげたのである。「上に政策あれば、下に対策あり」ということばが知られているが、この父親にはまさにそうした庶民の活力を見ることができる。

敢えて、両者の世界を対比的に輪郭づけると、社長のそれは法治社会であり、平等主義であって、これは作者自身が強い希求が投影されていると考えられる。一方、父親のそれは、人治の伝統社会である。そして、後者の方が現実の中国社会の基盤として広がっており、建前としての前者との間で活力を生み出しているのである。作品は、中国のこの二つの世界をなぞっていると言える。

四

前節では、跪くことが平等主義に反する陋習として否定されるが、現実には弱者の処世術として活用されているということを指摘した。作品では、跪くことを否定することが少年の精神的な成長として描かれていた。

ところで、他の作者・作品はこのことをどのように扱っているのだろうか。あくまで『精選』の範囲内での言及になるが、収録された153作品の中で、跪く人物が描写される作品は、「請站著認錯」を除いてほかに11作品ある。そのうち3作品は主人公に当たる人物が大学生になっていて、主題も類似している。作者にとっても読者にとっても好まれる話なのであろう。ここでは、朱暉の「永不録用」を取り上げてみたい。跪く場面が2箇所あり、下のよう

に描かれている。

父親がやって来た、埃まみれの破れた綿入れを着ていて、現代的な雰囲気のある学校内ではとりわけひどく目立った。父親は鼻水と涙をためて哀願して言った、「農村の子どもが重点中学に合格するのはたいへんなことなんです、もし除籍されてしまったら、この子の一生はそれで終わりです」。

「彼に与えたチャンスは十分なものだし、それに私はクラスのなかに集団に悪影響をもたらす者をおいておきたくないんですよ」とクラス主任はきっぱりと断った。

父親はよろめいて、パタンと床にひざまずいた。そこにいた人は皆あけにとられた、彼は胸をえぐられて、血が滴るようだった。とうとう爆発して、ぐいっと父親を支え起こして、凜とした口調で、「お父さん、頼むんじゃない、行こう」と言った。

クラス主任は蔑んで言った、「そうだ、おまえの田舎に帰ってネットをやるんだな、私がいる限りは、おまえのような救いようのない奴は永遠に採用することはないぞ」。

しかし、父親はほんとうに成し遂げた。父親は喜び勇んで家に飛んで帰ってきて、彼に、鎮の中学がおまえを編入生として授業を受けてもいいって許可してくれたぞ、と告げた。彼はたちまち涙がとめどもなく流れてきた、この数日父がたくさんの人にぺこぺこ頭を下げて頼み回ったのか、想像できた。彼はすすり泣きながら言った、「おとうさん、辛かったろう、みんな息子の親不孝のせいだよ」。父親は無邪気に笑って、「おまえが改まってくればそれでいいんだよ」。彼はひざまずいて誓って言った、「必ず以

前の誤りをすっかり悔い改めて、大学に合格します。」

また、曾祥伍の「母親的尊厳」では母と息子になるが、同様に田舎で貧しい環境にあり、息子は親を軽蔑している。ところが息子の大学の学費のために他人に跪く母の姿に、息子は大いに反省し、母ためには自分の命も惜しくないと宣言するようになる。この宣言の内容は母に跪くという所作とほぼ同義だと言っていいだろう。

もうひとつ、顧振威の「父親嘴里的魚鈎」では、貧しい環境で、息子は父の言うことを全く聞かず、学校から抜け出して釣ばかりしている。とうとう父は自分の身に傷を負う犠牲を払って息子に忠告する。父の情の深さに感動した息子は、父に跪き一生懸命勉強することを誓い、やがて大学生となる。

この3作品は「跪く」ことを強く肯定している。親は子のために自分の尊厳を捨てて跪く、子は親の情の前に敬意を表して跪くことが、道徳として要請されているのである。とくにエリートに対して、自己中心主義に陥らないように戒めていると言える。親に敬意を表して「跪く」ことが、すなわち成長なのである。

先の「請站著認錯」が近代化の方向を唱導する立場だとすれば、この3作品は近年の儒教思想の復興による社会秩序の安定を唱導する立場だと見なせよう。

五

前節で見たのは、自分の利益のために跪くのではなく、子（自分以外の人）のために自らの尊厳を捨てて跪く場合の尊さである。

このことを踏まえるとき、「請站著認錯」の少年が父親に押さえつけられて、ついに涙をためて膝を折ろうとする場面を、新たな視点から眺めてみたくなる。通常、これは父親の抑圧に屈服してゆく姿だと読み取るものであるはずだ。そして、少年のその屈服する姿を見るに忍びなくなり、社長は再雇用を認めることになったと理解するのである。

だが、そうすると、この少年の精神的成長はいかなる過程に見いだせるだろうか。もしも、少年に内面的な変化という契機がないのであれば、成長は全的に社長の支援に依存することになるだろう。果たして、それを成長と呼ぶべきものであろうか、甚だ疑問の余地が多い。

むしろ、少年が膝を折る場面は、内面の変化の現れであり、「跪く」ことの受諾と見なすべきであろう。当初、少年が「跪く」ことを嫌がったのは、自尊心を傷つけることになるからであった。今、少年は自尊心を守ることよりも大切なことがあるとはっきりと自覚し始めたのである。それは、母の命である。母の命を救う手術費用のためならば、自尊心を捨てることもやむをえないと考えるようになったのである。ここに少年の精神的成長を見いだすべきだろう。少年は「跪く」ことをあくまで拒否したことによって成長したのではない、「跪く」ことを受諾することによって成長できたのである。

【参考文献】

中国作協創研部選編『2009年中国微型小説精選』長江文芸出版社 2010年

姚荣涛「“跪拜礼”の起源和消亡」…『古代礼制風俗漫談（一）』中華書局

1997年3次印刷（第1版1883年）所収

パオロ・マッツァリーノ『パオロ・マッツァリーノの日本史漫談』

第八章つゆだくの誠意と土下座カジュアル 二見書房2011年

